

ニューズレター第六号

ドイツ現代史研究会ニューズレター第6号（2006年4月）

内容

- ・ ドイツ・博士号取得への道（西田慎）
- ・ 事務局代表を退任するにあたって（木戸衛一）
- ・ 2006年度事務局紹介
- ・ 会員の近著から（2006年1～3月）

ドイツ・博士号取得への道 西田慎（前ハンブルク大学大学院）

筆者は約4年に亘る留学の結果、2005年11月、ハンブルク大学社会科学部政治学科より博士号（政治学、Ph. D.）を授与された。本稿では、筆者が博士号取得に至る道のりを記すことで、今後ドイツで博士号取得を目指す後進の参考になればと思う。併せて、わが国では殆んど紹介されることのないドイツの緑の党の文書館事情にも触れたい。なお、本文で触れる博士号取得の手続き等は、2001-2005年当時のハンブルク大学社会科学部政治学科のものであり、時期・場所を異にすれば異なる場合もあることを、お断りしておきたい。

当時神戸大学文化科学研究科博士課程に在籍していた筆者が、ドイツへの留学を決め、準備に取りかかったのは2000年頃である。ドイツで博士号を取得するには、まず受け入れ先のDoktorvaterを決めなければならない。筆者は、ドイツの緑の党をテーマに博士論文を書きたかったので、緑の党研究の第一人者と言われるJoachim Raschke教授（ハンブルク大学）に手紙を書いて、Doktorvaterになってくれるように頼んだ。氏からは、まもなく定年を迎えることを理由に断られたが、代わりに大学の同僚であるMichael Th. Greven教授を紹介された。その後改めて、Greven教授に手紙を書いたところ、筆者のDoktorvaterになることを快諾していただいた。Greven教授は、1947年生まれ、歴史家K. D. Bracherの門弟に当たり、政治理論を専門とする政治学者である。

その後 2001 年 3 月に渡独した筆者は、半年間ブレーメンの Goethe-Institut に通って、ドイツ語のさらなるレベルアップに努め、最終的にブレーメン大学と Goethe-Institut が共同で実施する DSH (大学入学のためのドイツ語試験) にも合格した。またその間に出願していたハンブルク大学から、入学許可の通知を頂き、10 月にハンブルク大学社会科学部政治学科に入学することが出来た。ただし希望していた博士課程ではなく、普通の学部課程であった。筆者は事前に日本で取った学士・修士号や大学の成績証明書等の英訳を提出していたのだが、大学当局はそれを精査した挙句、当学科で Hauptseminar か Oberseminar に出席して 3 単位を取得後、博士課程への進学を認めると通知してきたのだった。

こうしてドイツでの学生生活が始まったのであるが、まず何よりも苦労したのがドイツ語である。筆者は親の仕事の関係で幼少期をドイツで過ごしたこともあって、ドイツ語には多少の自信もあり、渡独時点で既に、ドイツの新聞・雑誌記事程度なら辞書なしでもすらすら読める程度の知識があったが、実際にドイツで生活してみると、生半可な知識では太刀打ちできないことを思い知らされた。ゼミの議論でも、教授や学生は大変早口でまくし立て、こちらは聞き取るのが精一杯という状況だった。それ故筆者は、毎晩テレビで ZDF や ARD のニュースを見て、聞き取り能力を高めたり、普段電車やバスに乗っている時も、近くの乗客の会話に耳をそばだてて、語彙を増やしたりと、必死に努力した。

その結果ドイツ語能力も向上し、Hauptseminar や Oberseminar に出席して Referat も行い、最後に Seminararbeit を執筆して、無事 3 単位を取得した。Seminararbeit 提出時には、ゼミで知り合ったドイツ人の友人に、ドイツ語のネーティヴ・チェックをしてもらったことは言うまでもない。その後ゼミの単位取得証明書を大学当局に提出し、2004 年 4 月をもってハンブルク大学社会科学部政治学科の博士課程に進学を許された。さてこうした厄介な手続き面とは関係なく、筆者は 2001 年 10 月にハンブルク大学に入学した時点より、博士論文の執筆を開始していた。論文のテーマは「緑の党の党内潮流」というものであったので、2002 年夏以降、ベルリンにある緑の党の文書館を定期的に訪れて、関係史料を収集した。さらに翌年 9 月には 1 ヶ月間ベルリンに部屋を借り、毎日文書館に通っては史料を朝から晩まで漁るという生活を続けた。

緑の党の文書館は、正式名称を Archiv Gruenes Gedaechtnis と言い、Heinrich-Boell-Stiftung の傘下にある。ベルリンの旧東地区に位置し、地下鉄 5 系統の Frankfurter Tor 駅から市電 21 系統に乗って Samariterstrasse 電停で下車すれば、すぐである。ただしこの系統は本数があまり多くないので(日中 20 分毎)、S バーン 8/41/42 系統で Storkower Strasse 駅か、地下鉄 5 系統で Samariterstrasse 駅まで行って、そこから歩いた方が便利かもしれない。どちらからでも、徒歩 10 分ほどである。文書館自体は工場のような建物の中にあり、筆者が最初に訪れた時は、まさかそれが文書館の建物とは思わずに

前を行ったり来たりしたりして、ようやく探し当てた思い出がある。

文書館には緑の党の幹部会および事務局関係の文書、連邦・州・欧州議会の緑の党議員団関係の文書、さらには緑の党と密接な関係のある「新しい社会運動」関係の文書等が収められている。また党結党時の指導者で後に悲劇的な最期を遂げた Petra Kelly 関係の文書は、当文書館内の Petra-Kelly-Archiv に収録されている。文書館にはさらに、緑の党及び「新しい社会運動」関係の文献を豊富に揃えた図書館も併設されている。いずれにせよ、文書館訪問時には、事前にメールで連絡してほしいとのこと。文書の閲覧は、館内で申し込み用紙に記入して注文するという普通のシステムである。文書のコピーも可能だが、料金が高いので、筆者は必要最小限の文書のみコピーし、後は片っ端から文書の内容を持参のノートパソコンに打ち込んだ。館内に食堂はないが、周辺に Imbiss やスーパーがあり、食料の確保は容易である。文書館自体の利用者はそれほど多くなく、1日平均2,3人、朝から晩まで館内にいて、利用者は筆者のみということもしばしばだった。詳細については、当文書館のホームページ (http://www.boell.de/de/13_archiv/57.html) を参照されたい。

さて、博士論文執筆には、文書館所蔵の史料だけでは十分ではないために、筆者はそれを政治家個人所蔵の史料及び当事者へのインタビューで補うことにした。まずインタビューであるが、その方法に関して、筆者が採用したのは「数珠つなぎ方式」である。これはまず、自分がインタビューしたい相手を1人選んで、手紙やメールで、インタビューを申し込み、インタビューする。終了後相手に、あなたから見てこのテーマなら、次のインタビュー相手として誰がふさわしいかと聞き、幾人かの名前を挙げてもらう。その中から次のインタビュー相手を選び、改めて連絡してインタビューを申し込む、を繰り返すものである。こうして数珠つなぎのように、次から次へとインタビュー相手を紹介してもらい、最終的に、上はシュレーダー内閣の元閣僚や現役の政務次官から、下は党底辺の活動家まで、緑の党内外の政治家21人にインタビューすることに成功した。インタビューを申し込んでも、多忙を理由に断られることもあったが、多くは、こちらの研究意図を説明すると、喜んで応じていただいた。インタビュー時には、相手の了解を得て、ICレコーダーに内容を録音し、後で音声データをパソコンに移して、さらにCD-Rに保存した。

また相手の自宅に伺い、インタビューした後は、頼み込んで必ず所蔵の関連史料を見せていただいた。几帳面なドイツ人のこと、古参の党活動家などは地下室でファイルにびっしり昔の史料を保存しており、それをファイルごと借りてはコピーさせてもらった。こうして筆者は、派閥の会合の案内状や、その議事録、党内の選挙時の相手陣営の票読みメモ等、珍しい史料を得ることに成功した。さらにこうした一連のインタビューを通して、筆者は緑の党内外の多くの政治家と知り合うことが出来たが、とりわけ緑の党ハンブルク州支部 GAL の生き字引的存在である Kurt Edler (元 GAL 党代表) 及び Martin Schmidt (元ハ

ンブルク州議会 GAL 議員団代表) 両氏の知遇を得たことは大変幸運であった。両氏には、何度も自宅に呼んでいただいて、党内事情を教えていただいたり、知り合いの政治家を紹介していただいたり、食事を共にさせていただいたりして可愛がっていただき、現在に至るまで親しく交流を続けさせていただいている。さてこうして筆者は、2004年11月末には博士論文の第1稿を完成させ、Doktorvater や知り合いの研究者に見せてコメントを頂いた後、それを反映して、翌年1月末には最終稿を完成させた。さらにプロの Korrektor にドイツ語のネーティヴ・チェックをお願いし、最終的に2005年4月初めに、約400枚に亘る博士論文を大学に提出した。論文は無事受理され、その後11月初めに最終の口頭試問が行われた。口頭試問は、まず受験者が30分間、博士論文の内容について発表し、次に30分間、Doktorvater、第2審査担当教授、さらに数名の教授からなる試験官の質問に答えるものである。筆者はその際、パソコンのWindowsのPowerPointを使い、プロジェクターで壁に映写しながら、発表するという形を取った。その後の質疑では、筆者はかなり厳しい質問の嵐に晒されることを予想し、事前に多くの専門書を読んで、準備していったのだが、割と一般的な質問に終始し、拍子抜けしてしまった。続く審議の後、筆者に口頭試問に合格した旨伝えられ、その場で成績が言い渡された。因みに博士論文が gut(良)、口頭試問が gut、総合で gut であった。

こうして口頭試問にも合格して、最後のハードルを越えたわけだが、これでまだ終わりではない。博士号取得には、論文を出版することが条件である。ハンブルク大学図書館のホームページに掲載する形での「電子出版」も認められているが、筆者は自身の博士論文を多くのドイツ人に読んでもらいたかったために、多少お金はかかるものの、本として出版する道を選んだ。それ故、多くの政治学関係の本を出版し、定評のある LIT Verlag に、既に2005年6月に話を持ち込み、出版の約束を取り付けた。そして口頭試問合格の翌日に、出版社に原稿を持参し、出版契約を交わした。その後、ゲラ刷りの校正等を経て、翌月のクリスマス前には拙著を出版することが出来た。拙著の概要については、LIT Verlag の該当ホームページ (<http://www.lit-verlag.de/isbn/3-8258-9174-7>) を参照されたい。また契約時に出版社に出版証明書を発行してもらい、それを大学当局に提出して、最終的にすべての手続きが完了した。こうして2005年11月14日付けで、大学より博士号を授与された。それは奇しくも、筆者の35回目の誕生日であった。

博士号を取得するまでの道のりを振り返ってみると、それは筆者単独で成し遂げたものではなく、多くの人との出会いと支えによってのみ、初めて可能であったことに思い知らされる。Doktorvater である Greven 教授は、学問に対する姿勢は厳しい一方で、大変面倒見のいい方であり、多忙な傍ら、しばしば筆者の原稿を見ては、助言してくれた。出会いは偶然とは言え、氏の下で博士論文を仕上げられたことは、筆者にとって大変幸運であっ

た。また緑の党の政治家である Edler 及び Schmidt 両氏には、所蔵の史料を貸していただいただけでなく、多くの同僚の政治家を紹介していただき、さらには原稿に目を通していただいた。ゼミで知り合った友人の Carsten Thiele 君（現ドイツ外務省勤務）は、Seminararbeit 以来、原稿のドイツ語に関して、筆者の度重なる質問に、いつも丁寧に答えてくれた。筆者の博士号取得を、身内以外で最も喜んでくれたのも、彼であった。さらに個々に名前を挙げることは出来ないが、いつも助けてくれたゼミの同級生、インタビューに快く応じてくれた方々、親身に相談に乗ってくれた緑の党文書館のスタッフ等、周囲の支援なくしては、筆者の博士号取得は成らなかった。改めて感謝する次第である。最後に、残念ながら奨学金を受ける機会がなかった筆者の留学は、物質・精神両面に亘る両親の支援なくしては、実現しなかった。彼らへの感謝の念を記して、本稿の結びとしたい。

事務局代表を退任するにあたって

木戸 衛一（大阪大学教員）

あれは、一昨年（2004年）の7月頃だったであろうか。当時この研究会の事務局代表だった小野清美さん（大阪外国語大学教員）から突然電話があり、後任を引き受けてくれないかと要請された。最初ははっきり翌年度、つまり2005年度の話だと思い込み、「ずいぶん手回しがいいなあ」と驚いた。ところが、それは、既に始まっている2004年度のことで、しかも実質的な仕事は、次の例会がある10月からだという。今度は一転「何と悠長な」と驚いた。

1990年に阪大に赴任し、ドイツ現代史研究会に加わって以来、時折報告やコメンテーターの役は務めたけれど、私は必ずしも熱心な会員ではなかった。以前の例会会場（立命館大学白雲荘）の立地条件、それに日曜日の午後という時間帯から、あまり足繁く通うという気になれなかった。それに、東蝦夷（あずまえびす）の私には、井上茂子さん（上智大学教員）が本ニューズレター第3号で指摘されている、関東と関西での研究会の肌合いの違いも、人一倍強く感じられた。

それでも、研究会の事務局代表を引き受けたのは、小野さんや研究会の本部を置かせてもらっている服部伸さん（同志社大学教員）から、この研究会の将来に対する強い危機感を伺ったからである。事実、最近の事務局は、研究会を活性化させるための努力を重ね、例会の会場を京都駅前のキャンパスプラザ京都に移し、頻度も月1回からかなり緩やかにするなどしていた。それでも、ドイツ現代史ないしドイツ全般への関心が低下していることを背景に、例会参加者がなかなか増えない現実があった。

衆知のとおり、大学に身を置く人間も、今や新自由主義の競争原理に飲み込まれ、自己

評価だの外部評価だのと鬱陶しい雑務に追い立てられている。しょせんは市場原理の徹底化と個人の自己責任を強調し、社会の分断と格差を促すだけの「改革」に対して私は否定的だけれど、自己評価などで問われる「社会貢献」の一環として、この際研究会の仕事に取り組もうと考えた。

そこで、規約の制定、名簿の整理、会費納入状況の掌握などを通じて、研究会の態勢を立て直しを図った。「幽霊会員」の抹消、会員一人一人に応じた会費請求など、膨大な事務量を担ってくれた2004年度通信担当の柴田政子さん（現筑波大学大学院教員）、2005年度通信担当の福野明子さん、そして両年度会計担当の北岡幸代さんには感謝の言葉もない（福野さんと北岡さんは、会員名簿で所属の公開を控えられており、そのご意向に従った）。

さらに、新たな試みとして、研究会のホームページを作成、3カ月に1回の割合で、ニューズレターを発行することにした。会誌を発行する力量はなくとも、何らかの形で外部の方々にドイツ現代史研究会の存在をアピールする必要性を痛感したからである。佐藤あきさんの協力を得て、ホームページづくりが進み、それを通じて、入会の希望や報告レジュメの送付の要望などが事務局に届くようになった。また、今号の西田慎さんのように、ニューズレターに進んで執筆してくれる若手も出てきた。

研究会の内容面では、年度初めに構想していたこともないではなかったのだが、実際には報告者探しに四苦八苦し、自転車操業で終わってしまった。そのせいもあってか、例会の参加者数が、期待していたほどには上向きにならなかったのは、心残りである。

それでも、2年度にわたり事務局代表を務めたことで、私には、この研究会の取り柄がよく見えるようになった。それは、第一線の研究者が、権威主義とは対極的なざっくばらんな態度を保ち、どんな報告に関しても、自由で率直な意見交換が行われるという点である。この長所は、3月恒例の「修論報告会」で顕著に伺えるが、私は、それらの方々の本研究会への愛着、後進の育成への情熱に深い敬意を覚える。

だからこそ、若手研究者のみなさんには、気後れせずに例会に参加し、積極的に発言していただきたい。私が大学院生だった20年前、既に「研究者のタコツボ化」は指摘されていた。今や院生の間では、業績稼ぎに夢中で、自分の研究テーマと直接関係ない報告には何ら関心を示さないという傾向が強まっているように思われるが（これまた、新自由主義の害悪の一つである）、歴史研究に携わる者にとって、そのような人間学的省察を欠いた研究態度が、真に立派な業績を生み出すとは思えない。

他方、教員クラスの会員諸氏は、ご自分の院生はもちろん、学部学生も連れだって例会に来ていただきたい。どの研究会でも見受けられる現象であるが、昔ながらのエスタブリッシュメント中心の運営を続けようとしても、先細りは目に見えている。いかに若い人たちの関心を引きつけて研究会を活性化させるか、40年近い歴史を持つドイツ現代史研究会

の将来は、すぐれて会員各位の主体的関与にかかっていると思う。

2006 年度事務局

代表：丸島 宏太（姫路獨協大学外国語学部教員）

事務局長：野田 昌吾（大阪市立大学大学院法学研究科教員）

通信：磯部 敦子（大阪大学大学院国際公共政策研究科博士前期課程）

会計：森 征樹（大阪市立大学大学院法学研究科博士後期課程）

会計補佐：近藤 正基（京都大学大学院法学研究科博士後期課程）

会員の近著から（2006 年 1～3 月）

- ・ 大津留厚「「アメリカ」の誕生、またはもう一つの失われた故郷——ボヘミアからミネソタへ」高橋秀寿・西成彦編『東欧の 20 世紀』人文書院（2006 年 3 月）
- ・ 木戸衛一「「改革」に高まる不信——ドイツ総選挙が意味するもの」『軍縮問題資料』303 号（2006 年 2 月）
- ・ 木戸衛一「ノスタルジーか自己エンパワーメントか——東ドイツにおける「オスタルギー」現象」高橋秀寿・西成彦編『東欧の 20 世紀』人文書院（2006 年 3 月）
- ・ 近藤潤三「現代ドイツのイスラム組織とイスラム主義問題——トルコ系移民社会を例にして」『社会科学論集』（愛知教育大学地域社会システム講座）第 44 号（2006 年 3 月）
- ・ 近藤潤三「ドイツの「月曜デモ」（2004 年）に関する一考察——社会国家縮小過程の政治的断面」『社会科学論集』（愛知教育大学地域社会システム講座）第 44 号（2006 年 3 月）
- ・ 近藤潤三「戦後ドイツの街頭政治について」『社会科学論集』（愛知教育大学地域社会システム講座）第 44 号（2006 年 3 月）
- ・ 近藤潤三「ドイツで開館した海外移民記念館について——出移民から見えてくること」『社会科学論集』（愛知教育大学地域社会システム講座）第 44 号（2006 年 3 月）
- ・ 近藤潤三「ドイツの主要なイスラム組織」『社会科学論集』（愛知教育大学地域社会システム講座）第 44 号（2006 年 3 月）
- ・ 末川清「戦後民主主義一期生としての私」『歴史評論』第 671 号（2006 年 3 月）
- ・ 高橋秀寿「社会主義国家の建国神話——『戦艦ポチョムキン』から『グッバイ、レーニン！』まで」高橋秀寿・西成彦編『東欧の 20 世紀』人文書院（2006 年 3 月）

- ・坪郷實「ヨーロッパにおける市民社会強化戦略——ドイツにおける「市民自治体」の構想」高橋進・坪郷實編『ヨーロッパ・デモクラシーの新世紀』早稲田大学出版部（2006年2月）
- ・中谷毅「ドイツの外交安全保障政策と欧米関係——シュレーダー政権の模索」高橋進・坪郷實編『ヨーロッパ・デモクラシーの新世紀』早稲田大学出版部（2006年2月）
- ・野田昌吾「グローバル化のなかのヨーロッパ協調政治——1990年代以降のヨーロッパにおける協調行動の位相」高橋進・坪郷實編『ヨーロッパ・デモクラシーの新世紀』早稲田大学出版部（2006年2月）
- ・野村真理「何も終わっていない——東ガリツィアにおけるホロコーストの記憶をめぐって」高橋秀寿・西成彦編『東欧の20世紀』人文書院（2006年3月）
- ・水野博子「「マイノリティ」を「保護」ということ——国際連盟によるシステム化と支配の構図」高橋秀寿・西成彦編『東欧の20世紀』人文書院（2006年3月）
- ・山口定『ファシズム』岩波現代文庫（2006年3月）